

農林被害防止のためのくくり罠による効果的なニホンジカ捕獲方法の開発 令和2年度（国補：鳥獣被害防止総合対策交付金）

川島直通

本調査では農地周辺における ICT 囲い罠による捕獲に加え、農地後背山林において既往の捕獲方法であるくくり罠による捕獲を実施し、集落スケールにおいて農地や山林におけるシカ出現頻度を効果的に低下させることができるかを検証する。また、シカ捕獲場所、捕獲数およびシカ出現頻度を継続的にモニタリングし、一度シカ出現頻度が低下した地域において、捕獲圧を変えることでシカの出現頻度がどのように変化していくのかを調査する。さらに、くくり罠を用いた効果的なシカ捕獲方法の検討を行う。

1. モデル地区におけるシカ出現頻度の経時変化

三重県伊賀市に位置する子延地区では 2017～2018 年度に集中的な農林併行捕獲を実施した結果、シカ出現頻度が大幅に低下していた。この地区において 2019～2020 年度に捕獲圧を下げて捕獲を実施し、シカ出現頻度がどのように変化するかを調査した。農地後背山林に 16 台の自動撮影カメラを設置し、捕獲期間中のシカ撮影頻度を調査した結果、2019 年度や 2020 年度はシカ撮影頻度が増加傾向にあることがわかった。

三重県伊賀市に位置する富永地区において、2020 年度より集中的な農林併行捕獲を実施した。農地後背山林に 14 台、農地に 4 台の自動撮影カメラを設置し、捕獲期間中のシカ撮影頻度を調査した。その結果、農地後背山林におけるシカ撮影頻度は 12 月以降低下し、農地におけるシカ撮影頻度は 10 月以降低下した。これはシカの個体数減少によるものでなく、単にシカの活動域や活動の活発さが季節により異なることによる可能性があるため、継続して自動撮影カメラによるモニタリングを行う必要がある。

2. くくり罠による効果的なシカ捕獲方法の検討

くくり罠の誤作動による捕獲個体の捕り逃がしを防止することを目的とし、くくり罠を安定的に作動する構造に改良することを試みた。改良したくくり罠によりシカ捕獲を実施し、改良前のくくり罠を用いた昨年度の捕獲結果と比較した。改良前のくくり罠については 2019 年 8 月～2020 年 3 月に伊賀市子延地区の農地後背山林で、改良後のくくり罠については 2020 年 5 月～2021 年 3 月に伊賀市富永地区の農地後背山林で捕獲試験を実施した。なお、改良前、改良後ともにくくり罠の周囲に誘引餌（ヘイキューブまたは米ぬか）を置いて捕獲を実施した。（誤作動回数）／（作動回数）については、改良前のくくり罠による捕獲では 10/15、改良後のくくり罠による捕獲では 1/12 となり、誘引捕獲における誤作動の発生頻度が低下した。

誘引餌を用いたくくり罠による捕獲方法の捕獲効率を上昇させることを目的とし、シカを罠の上に誘導するために、丸太を罠の両脇に配置する方法により捕獲を試みた。捕獲試験は 2020 年 7 月 20 日～8 月 19 日に伊賀市富永地区で実施した。また、誘引餌としてヘイキューブを用いた。くくり罠の設置位置付近には自動撮影カメラを設置し、シカの行動および捕獲の成否を動画撮影した。撮影動画から、シカが罠付近に出現した回数のうち、シカが捕獲された回数および餌を採食した回数をカウントし、丸太と餌を用いた誘引捕獲（罠設置数：3）と餌のみによる誘引捕獲（罠設置数：3）で比較を行った。（捕獲頭数）／（罠付近に出現したシカ撮影回数）については、丸太と餌を用いた誘引捕獲では 2 頭/42 回、餌のみによる誘引捕獲では 2 頭/25 回となり、丸太で誘導することにより捕獲数が増えることはなかった。また、（採食回数）／（罠付近に出現したシカ撮影回数）については、丸太と餌を用いた誘引捕獲では 5 回/42 回、7 回/25 回となり、丸太を配置した方が誘引餌の採食頻度が減少する可能性が考えられた。